
 学 会 記 事

第47回膠原病研究会

日 時 平成2年6月13日(水)
午後6時
会 場 有任記念館

I. 一 般 演 題

1) 高度関節破壊を示した PSS に malignant lymphoma を合併した1剖検例

高橋知香子・村沢 章
中園 清・田中 隆明 (県立瀬波リウマチ
青木 薫・戸内 英雄 (センター整形外科)
小沢 哲夫 (同 内科)
菊地 正俊・佐藤健比呂 (新潟大学第二内科)

手指に、ムチランス様の高度骨破壊を示した、全身性皮膚硬化症 (PSS) の1例 (59才, 女性) を経験した。本例は、29才頃から、RA として治療を受け、昭和62年、当院入院時、足趾潰瘍、肺線維症、嚥下困難、また、両上腕、股関節周辺など全身性に、高度なハイドロキシアパタイトの蓄積が認められた。さらに抗核抗体、抗 Scl-70 抗体などの各種自己抗体が陽性で、白血球減少 (主にリンパ球)、肝脾腫を伴うなど、多彩な臨床症状を呈した。1989年10月、肺感染をくり返した後、肺出血にて死亡。剖検時、両肺野に、malignant lymphoma の合併がみられ、本例の診断とともに、lymphoma の原発巣、発現時期、さらに PSS と malignant disease との関連などについて検討した。

2) SLE に伴った livedoido vasculitis の
1 例

風間 隆・野本 重敏
佐藤 良夫 (新潟大学皮膚科)

25歳男。家族歴、既往歴に特記すべきことなし。昭和58年に蝶型紅斑を認めるようになり、昭和59年当科を受診した。SLE と診断しプレドニゾン 30 mg で治療を開始した。以後、佐渡総合病院皮膚科で経過観察していた。昭和61年に手背、足底、顔面に、不整形小白斑が発生し、昭和62年には下腿、踵部、足底に潰瘍を認めるようになった。プレドニゾン 20 mg に増量しても改善しないため当科を紹介された。顔面、四肢、上背部に不整形で白色陥凹性局面で、その周辺に毛細血管の拡張

を伴う、いわゆる atrophie blanche を認めた。下腿前面、足底の atrophie blanche には下掘れ状の潰瘍を伴っていた。組織では少数の好中球浸潤を伴うが核塵を認めず、主な変化は真皮全層の小血管の血栓形成であった。プレドニゾン 40 mg に増量しても皮膚症状は改善しないため、アスピリン 20 mg、塩酸チクロピジン 200 mg、ジピリダモール 150 mg を併用したところ、潰瘍の上皮化をみたが atrophie blanche の変化は認められなかった。

3) プシラミンによる膜性腎症を認めた慢性関節リウマチの5例

小沢 哲夫 (県立瀬波リウマチ
センター内科)
戸内 英雄・青木 薫
田中 隆明・高橋知香子
中園 清・村沢 章 (同 整形外科)
本間 智子・菊地 正俊
佐藤健比呂・中野 正明
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)

対象：プシラミン (BCL) 使用中に持続性蛋白尿を認めた慢性関節リウマチ (RA) 患者5例について、臨床像と腎組織所見を検討した。結果：尿所見は蛋白尿が主体 (0.3~3.0 g/日以上) で、持続性の血尿 (毎視野5個以上) を認めた症例は1例のみであった。定期的に尿検査を施行していた4例では、BCL 開始から蛋白尿出現までの期間は平均約4カ月で、BCL の通算使用量は平均 21.3 g (10.5~38.6 g) であった。腎生検所見では、5例とも糸球体基底膜の膜性変化が主体であった。2.0 g/日以上蛋白尿を認めた2例に対して、プレドニゾン 30 mg/日を使用したところ、3~4週目から著明な尿蛋白の減少を認め、尿所見は正常化した。しかし、蛋白尿消失後、2カ月以上経過して行った再生検でも、膜性変化は残存していた。ステロイドを増量しなかった3例は、平成2年6月の時点では蛋白尿が持続している (観察期間2~10カ月)。結語：BCL による腎障害は膜性腎症が主体で、ステロイド療法が有効と考えられた。今回の5例は、RA の活動性に対しては BCL が奏功しており、今後は使用量の再考など、副作用を生じないための工夫が重要と考えられた。